

平成28年6月20日

在京白聖会 年次幹事 各位

在京白聖会

50周年記念誌編集委員会

在京白聖会50周年記念誌への寄稿のお願い

年次幹事の皆様には、在京白聖会の活動に多大なるご協力をいただきまして誠にありがとうございます。
おかげ様をもちまして、来たる平成31年5月13日に本会は50周年を迎えます。

50周年の記念事業として、半世紀の歩みを標す記念誌を発行して思い出をふりかえり、会の益々の発展を
祈願したいと思います。

編集作業の開始にあたり、これまでの定期総会の記録を集めて通史を編纂したいと思いますので、何卒
ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。記念誌の企画概要と依頼内容は下記の通りです。

記

1. 記念誌の企画概要

①通史 ②座談会 ③各年次活動 ④クラブ活動 ⑤芸術祭 ⑥総会記録 ⑦会報記録 ⑧会則
⑨歴代役員名簿 ⑩年表 ⑪総会出席者名簿 ⑫その他の企画は今後検討

2. 寄稿（2原稿）の依頼内容

①各年次同期会の活動報告（上記③）

各年次同期会の活動状況について、800字以内で原稿用紙かWORD（A4横書き横40字×縦20行）
入力した原稿と、写真2枚を郵送または電子メールでお送り下さい。

②総会幹事年の総会報告（上記⑥、⑪）

皆様の年次が担当された総会の企画および結果について、標題含め800字以内で、原稿用紙かWORD
（A4横書きで横40字×縦20行）入力した原稿と写真2～3枚、出席者名簿、開催パンフレットを郵送
または電子メールでお送り下さい。原稿には開催年月日、会場、参加数、アトラクション、工夫点、
エピソードなどを記述していただくようお願い申し上げます。

なお、編集の都合上、編集事務局にて原稿を加筆・修正する場合があることと、写真は選択のうえ掲載する
ことについて、予めご了承願います。また、お借りした写真は返却いたします。

3. 原稿締切日等

本年7月15日までに年次の連絡責任者をご報告いただき、原稿は本年12月31日までに、下記へ送付
願います。

4. お問い合わせ先・原稿送付先（編集事務局・11/8 住所更新）

住 所 : 〒252-0805 神奈川県藤沢市円行 1868-1-D203

メールアドレス : hakuajou@i.softbank.jp （送信完了を確認して下さい）

電 話・氏 名 : 080-7854-8457 岩澤 新治 （昭和45年卒）

5. 原稿受領の確認について

原稿の掲載漏れを防ぐため、受領確認のご連絡をいたしますのでご確認願います。

なお、原稿送付時に、連絡先電話番号と有ればメールアドレスも記載願います。

以 上

■在京白聖四三会

大澤 邦雄

私達の年次名は在京四三会で、会員数は約120名前後です。在京とわざわざ入れているのは、在京四三会があるからで、相互に連係を持って活動しております。特に平成12年に私達が幹事年次となりました在京白聖会総会開催に際しましては、盛岡から大挙して上京して貰った、という経緯があります。

定期的な活動としては、年に一度、新年会を開催しております。集まりには概ね30から40名ほどが集まっており、今年は2月21日に予定しています。例年、盛岡で実施する新年会(期日は正月2日に固定)にはこちらからも参加し、東京の新年会にも何人かの人から来て貰っています。

それ以外の活動としては、ここ数年、年に一度の割でハイキング(実績：山梨県大月市の岩殿山、茨城県大子町の袋田の滝)に行ったり、海外長期出張者が出たような場合、そ

の杜行会を開いております。これらの様子は、当会のホームページ(管理人：澤藤隆一君)に掲載されることとなります。

このホームページには、その他に、新年会等の連絡をしたり、あるいは盛岡及び東京での新年会の様子が、写真入りで掲載されております。

会社勤めの大半の会員があと5、6年で定年を迎える訳で、それからが、このような会合の持つ意義が深まる時期と思っております。会社人間から抜け出た後こそ、人生の楽しみがある筈。同期生が手を繋ぎ合って、これからの人生をエンジョイする手助けを、三会として実施して行くつもりです。



昭和44年卒は、主に昭和25年生まれ(昭和26年生まれで早生まれ)で構成されております。所謂「団塊の世代」は、昭和24年生まれまでを指すようですから、辛うじて「団塊の世代」を免れた年次ですが、「団塊の世代」に負けず劣らず、激烈な競争を強いられた年次だと思います。我々が生まれた昭和25年(1950年)は、朝鮮戦争の始まった年で、この年に生まれたこと自体、その後の激動の歩みを暗示するものです。

我々の年次に一番最初に訪れた試練は、東大の入試が大学紛争の原因となって廃止されたことです。東大の入試がなかった影響は、玉突きのように各大学の入試に波及し、我々の年次の人生に大きな影響を与えたことは間違いないでしょう。

我々の年次は、余り勉強には熱心とは言えない年次であったこととありますが、我々の年次で東大に進学した人数は、例年から比較するとかなり少ないのではないかと思います。

我々の年次の金字塔は、なんととっても甲子園出場、それもベスト8に進出したことでしょう。あの頃もそれなりにすごいことだとは思っていましたが、大人になって振り返ってみると、進学校であって特に野球が上手な生徒を集めるようなことをしない盛岡一高が全国の強豪を相手にベスト8にまでなったということは大変な快挙だと思うのです。

そのことが、我々の年次の誇りであり、その後の人生に大きな自信を与えてくれたと思います。

幹事 片山 卓朗

甲子園出場等によって昂揚した気分は、その後卒業式まで続きました。そして全国にテレビ報道された「垂れ幕事件」に発展しているのです。「垂れ幕事件」の前には「ドームペンキ塗り事件」があったこともあって、卒業式の後に先生方から「イタズラが過ぎる」と小言をもらったことを覚えております。

我々の年次に限らず、当時の盛岡一高の生徒は、個性豊かに、自由奔放に学校生活を送っていたと思います。

生徒ばかりでなく、先生方も個性豊かな人が多く、そのような生徒や先生方と接すること自体が学校生活を豊かにしたと思います。

そして、勉強も大変でしたが、応援歌練習、運動会、体育祭、文化祭と節目節目にイベントが目白押しで、毎日学校に行くのが楽しくて仕方がなかったことを覚えています。

今思うと「この世の天国というものがある」とすれば当時の盛岡一高がそうだった」と感じるのには私だけではないと思います。